

こころの玉手箱 5月号



この人に学ぶ「松井秀喜のいい話」

詫間中学校では、毎月17日の朝の時間を利用して、全校道徳【イ〜なの日】を実施しています。今回は、プロ野球やメジャーリーグで活躍し、引退して尚ファンからの人気も絶えない、松井秀喜さんの生き方から、多くのことを学びました。



☆ 1年生 ☆

- ☆ 人と話すときに、記者の人たちや、取材の人たちの目を見て話すことができるのがすごいと思った。たくさんの賞や MVP をとって努力していると思ったので、私も努力しようと思った。
- ☆ 松井さんは人にやさしく丁寧だったから、松井さんを好きな人がたくさんいると思った。松井さんのようになりたい。
- ☆ 松井さんが引退してもファンから歓声を受けていたのは、インタビューにも嫌な顔一つせず、答えていたからでした。松井さんのそんなところを見習いたいです。
- ☆ どんな時でも笑顔でインタビューに答え、その場を温かくしてくれて、すごく素敵だなと思いました。私もそんな存在の人になりたいです。

☆ 2年生 ☆

- ☆ どんなに悪い成績を取ったとしても、どんな質問にも嫌な顔をしないでいられて、「とても心の器が広いんだなあ」と思った。そんな松井秀喜さんみたいに心の器が広い人になりたいです。
- ☆ 松井さんのようにだれでも敬意をはらって接しているのがかっこいいなと思いました。自分も人とのつながりを大切にして、相手のことを思って行動したいです。
- ☆ 松井さんは試合で打てなくても、人の心を忘れず、人を尊重し思いやったからこそ、日本でも海外でもたくさんの人から応援される人になったと分かりました。これからは、松井さんのように器の大きい心の広い人になりたいです。
- ☆ いつでも相手思いだから、松井さん自身にもその思いが還ってくるのだと思いました。どんな時でも素直で相手思いだから、有名になれたのだと思いました。

☆ 3年生 ☆

- ☆ 松井秀喜さんはプレーと態度両方が一流だと思った。私が松井秀喜さんの立場になって考えると松井秀喜さんの心の器の広さが分かってくる。私も誰に対しても尊敬の気持ちをもって接したい。
- ☆ 今回の道徳は、とても難しい話でした。でも1つだけ分かったのが、自分がどれほど苦しい場面に合っても相手のことを思って行動することを忘れないということです。
- ☆ 今日の話で心に残ったことは、どんな時も明るくインタビューを受ける姿です。どんなに嫌なことと言われても器が大きくて相手を敬い、尊重する心を忘れずにいたからこそ、今でもレジェンドとして名前を上げられるのだと思いました。
- ☆ 野球がうまいだけが大切ではなく、人としての器も大切なのだと思いました。それとブーイングを受けても、くじけない心、



保護者の皆さんへ

お子様と意見の交換をして、感想などをお気軽にお寄せください。

----- 切り取り線 -----

保護者返信欄 (お子さんを通じて担任までお渡し下さい。)

資料：松井秀喜さんのいい話

今回は、松井秀喜さんについて話したいと思います。

皆さんは、松井秀喜さんを知っていますか。松井秀喜さんは、1974年6月12日生まれ、石川県出身。地元の野球強豪校である星稜高校で、4番として甲子園に4度出場。甲子園での4本を含む高校通算60本塁打の強打者として1993年ドラフト1位で読売ジャイアンツに入団。1998・2000・2002年には本塁打と打点の二冠王。2001年には首位打者を獲得するなどジャイアンツのクリーンアップとして活躍。守備でもその年の守備の一番上手な人に贈られるゴールデングラブ賞を2000年から3年連続で受賞しています。さらに2003年からは野球の本場アメリカのメジャーリーグの強豪チームであるニューヨーク・ヤンキースへ移籍。2009年にはヤンキースが9年ぶり27回目のワールドチャンピオンに輝き、その年の活躍が評価され、日本人で初めてMVPを受賞。2012年に引退し、2013年には、国民栄誉賞を受賞しています。これだけの素晴らしい経歴の裏に隠された、話をある雑誌社の記事から紹介したいと思います。

毎年恒例で行われているオールドタイマーズ・デーと呼ばれるヤンキースのOB戦がヤンキースタジアムで行われ、この年、松井秀喜さんが引退後初めて試合に出場した。試合前に行われた打撃練習では、早くからかけつけたファンを前に21スイングで4本塁打。現役時代さながらのパワーを見せた。

試合前のセレモニーでは2009年のワールドシリーズでMVPに輝いた映像が流れ、「お帰り、ゴジラ！」と紹介された。するとスタジアムは大歓声に包まれ、スタンディングオベーションが起こった。並みいる歴代のそうそうたるOBを差し置いての大歓声に、松井秀喜さんがこの街で築き上げてきた功績がいかに偉大であったかが分かる。

松井秀喜さんがヤンキース在籍の7年間で残した成績は、916試合に出場して打率2割9分2厘、140本塁打、597打点。打線の中軸に座り、チームバッティングだけでなく、無類の勝負強さを発揮したが、決して突出した成績を残したわけではない。それでもヤンキースファンは、チームを去ってから5年が経つというのに、今も松井秀喜さんに敬意を表し大きな拍手を贈る。その理由はどこにあるのだろうか。

松井秀喜さんがメジャーデビューした2003年。開幕してから2か月。手元で動くツーシーム（変化球の呼び名）に苦しみ、打率は2割5分前後。内野ゴロの山を築き、ニューヨーク・タイムズ紙からは「ゴロキング」というありがたいニックネームをつけられた。米国人記者たちは連日のように「なぜ打てないのか」と松井秀喜さんに迫った。それでも彼は、嫌な顔ひとつせず、ひとりひとり記者の目を見ながら誠実に質問に答えた。そうした姿勢が評価されたのか、シーズン終了後に野球記者協会から「グッド・ガイ賞」なるものが贈られた。当時、松井秀喜さんに「受賞の理由は、どこにあると思うか」と聞くと、次のような言葉が返ってきた。「僕の話聞いた人が何を感じるのかは分かりませんが、敬意を払うということは大切だと思っています。チームメイトや関係者はもちろん、記者やファンも同じ。相手を敬い、尊重する心を持つ。それは常に心がけてきたつもりです。もし、それを評価していただいたのであれば、とても嬉しいことです。」

ヤンキース移籍後も、日本時代同様に豪快な本塁打でチームをけん引することを期待した私がスイングのことについて散々書いても、決して怒ることはなかった。そればかりか、「日本と同じように打てないのは事実だから」と笑い飛ばしてくれた。

そして忘れもしないのが、2012年7月22日のことだ。当時、レイズに移籍していた松井は、1点を追う9回ツーアウト、1・2塁の勝ち越しのチャンスに代打で登場した。しかし、打率1割台に低迷していた松井秀喜さんはレイズのファンから容赦ないブーイングを浴びせられていた。結果は、ショートフライでゲームセット。この2日後、松井秀喜さんは戦力外通告を受け、これが最後の打席となった。試合後のクラブハウスは重苦しい空気が流れ、誰も松井秀喜さんに近寄ろうとしない。だが、私にとっては、この日がこの年初めて松井秀喜さん取材した試合だった。すると彼の方から、「久しぶりだね。元気？」と声を掛けてくれた。私は、久しぶりに会うことに対し謝罪し、「元気ないね。頑張るよ」と声を掛けると、「こんな状況で元気いっぱい振る舞っていたら、それこそおかしいでしょう」と笑い、こう続けた。「何か聞きたいことあるんじゃないの？遠慮しなくていいよ。」どんな時でも彼は取材する側を思いやってくれた。思い起こせば、現役時代の松井秀喜さんはいつも取材に応じてくれた。どんな質問にも記者の立場を否定することなく対応し、サインをはじめとするこちら側のお願いごとにも応えてくれた。今にして思えば、松井秀喜さんの人間としての器の大きさにどれだけ甘えてきたのかを恥じるばかりだ。

相手を敬う心、尊重する心を持つ松井秀喜さんの気持ちが、早くからニューヨークのファンに伝わった。だからこそ、ファンは今も変わらぬ拍手、声援を送るのだ。そして、松井秀喜さんは変わらぬ温かい声援に幸せを感じとっていた。